清代小説『繡戈袍全伝』成書考

――木魚書『繡戈袍全本』および弾詞『倭袍伝』との比較から――

岡崎由美

一・前言

小説『繡戈袍全伝』は、清代に一世を風靡し、現在なお弾詞の名作として演じられている『倭袍伝』（一名『果報録』、又名『荊襄快談録』）のいわゆる小説版である。弾詞と小説のいずれが先かという問題については後述するが、『倭袍伝』の物語は、戯曲、語り物芸能、民歌俗謡と多様なジャンルにまたがり、おおむね江南から福建、広東に至る東南沿海部に集中して流布し、極めて地域性の高い特徴を呈している。[1] 例えば現代地方戯では崑曲のほか、紹興戯（浙江紹興）、婺劇（浙江金華）、越劇（浙江・上海）、揚劇（江蘇揚州）、錫劇（江蘇無錫）、蒲仙戯（福建）、閩劇（福建）など東南沿海部の演劇に多数この演目が見られ、さらに滇劇（雲南）、川劇（四川）など遠く西南中国の戯曲にも伝播した。語り物芸能では、弾詞をはじめ、宝巻、広東木魚書などにこの物語が見られる。小説はこうした芸能を中心とする物語の多様な流布の中に位置付けられると共に、その出版地が広東であることから、東南沿海部における物語の流布という地域性の中にも位置づけられることになる。弾詞は道光～同治年間にしばしば淫書とされて江南では上演・出版の取り締まりに遭うが、禁令をかいくぐるために書名や演目名を変えたり、福建など江南以外の土地の書賈に出版を委託したりして、却って版本の多様化と隣接地域への物語の拡散を促進した様相が見られる。[2]

また、小説『繡戈袍全伝』は、中国国内での伝本が稀少であり、一九二〇年代～三〇年代にかけて、鄭振鐸をはじめとする研究者らがパリとロンドンに流出した版本を「発見」するまでは、顧みられることのなかった作品である。実際のところ、本小説は決して文学史上でその文学性を高く評価されるものではなく、いわば「中国で忘れ去られた稀書が海外で発見された」という、近代における中国俗文学研究にありがちな背景も、その存在感に幾分かの輝きを加えているといってもよい。そのゆえか、本作品はパリとロンドンに流

出した版本の書誌が取られた後も、ほとんど研究の対象とはされてこなかった。しかしながら、本小説が依拠した物語は、多様な媒体で広く流布し、極めてよく知られた名作であり、本作品はその唯一の小説版である。その成書の状況、特に出版時期と出版の背景を考察することは、物語の流布を明らかにする上で十分な意義を持つものである。

このように中国東南沿海部における芸能の流通と出版という観点に基づき、本稿は、清代の小説『繡戈袍全伝』の成書に関して、物語の流伝と小説の刊行がいつ、どのような環境下で行われたかということを、主に弾詞『倭袍伝』および木魚書『繡戈袍全本』との関わりから考察したものである。

二、小説『繡戈袍全伝』の版本

まず、小説『繡戈袍全伝』の物語概要を紹介しておく。本作品のストーリーは二つの物語がよりあわさっている。一つは明の嘉靖年間、朝臣唐尚傑一門が奸臣張光の讒言によって斬首されるが、落ち延びた末子唐雲卿が旗揚げし、一門を再興するという英雄戦記小説の流れを汲むものである。もう一つは、唐雲卿の義兄弟刁南楼が、情夫と通じた妻に毒殺されるが、やはり刁南楼の義兄弟である毛天海によって、姦夫姦婦は裁かれるという裁判ものの物語である。

先に簡述した通り、小説『繡戈袍全伝』が近代の学術の対象として取り上げられるのは、一九二七年鄭振鐸が「巴黎国家図書館中之中国小説与戯曲」[一〇]において、パリ国家図書館所蔵の福文堂刊本の調査を行い、この小説が弾詞『倭袍伝』を改編したものであること、この福文堂本の刊行を道光（一八二一～一八五〇）～咸豊（一八五一～一八七四）年間と推定したことに始まる。ただし、刊行時期を推定した根拠については明確にされていない。一九三七年パリとロンドンで書誌調査を行った劉修業の『古典小説戯曲叢考』[一一]、孫楷弟『中国通俗小説書目』「明清小説部乙」[一二]にもパリ国家図書館所蔵福文堂刊本の著録がある。福文堂刊本はパリ以外にロンドンの英国博物院にも所蔵されており、柳存仁『倫敦所見中国小説書目提要』[一三]に著録がある。また、魏崇新・周志明・関四平『中国禁毀小説漫話』[一四]によれば、天津師範大学図書館にも福文堂本が所蔵されているとのことである。さらに、譚正璧・譚尋『古本稀見小説滙考』[一五]では、譚正璧旧蔵の「旧刊本」と「鉛印大字本」が挙げられているが、両方とも文化大革命の際に散逸したという。以下、書目類に著録された『繡戈袍全伝』の版本を整理しておく。

①『繡戈袍全伝』八巻四十二回　江南随園主人著

福文堂刊本　十行×二十字　図十葉　小　道咸間刊　巴黎国家図書館・英国博物院・天津師範大学図書館所蔵

著録：鄭振鐸『巴黎国家図書館中之中国小説与戯曲』、孫楷『中国通俗小説書目』、劉修『古典小説戯曲叢考』、

柳存仁『倫敦所見中国小説書目提要』、魏崇新・周志明・関四平『中国禁毀小説漫話』、大塚秀高『増補中国通俗小説書目』[8]

②『繡戈袍真本』八巻四十二回　江南随園主人著

刊本　十行×二十字　図十葉　小　中国国家図書館所蔵

③（広州）五桂堂刊本　十行×二十字　図十葉　小

著録：排印本『繡戈袍全傳』（李力校点、宝文堂書店、一九八二年）

④刊本　十行×二十字　図十葉　小　コロンビア図書館所蔵

著録：大塚秀高『増補中国通俗小説書目』

福文堂刊本の『繡戈袍全伝』なる書題は封面題であり、目録題、巻首題、本文版心題はいずれも『繡戈袍真本』である。封面に「福文堂梓」とある。中国国家図書館所蔵本は福文堂と同版だが、封面が見られず、目録題、巻首題、本文版心題は同じくいずれも『繡戈袍真本』である。挿図全十葉は、毎半葉一図、全二十図で、図の上部ほぼ三分の一に賛がある。五桂堂本の挿図を、福文堂本、中国国家図書館本の挿図と比較すると、版式、絵組は全く同じだが、五桂堂本は幾つかの登場人物の顔立ちが明らかに異なり、しかも稚拙で粗雑な筆致となっている。おそらく五桂堂が板木を入手した後、磨滅のひどい顔の部分を拙速に彫り直したのであろう。

福文堂の活動時期については、柳存仁『倫敦所見中国小説書目提要』に、同氏が目睹した福文堂の版本として、乾隆四十八年梓『大説唐全伝』、嘉慶五年刻『二度梅』、嘉慶六年刻『説岳全伝』、道光十五年刻『薛仁貴征東全伝』などを挙げており、その活動時期は少なくとも六十年余りの歴史があるとする。大塚秀高『増補中国通俗小説書目』には、

『二度梅全伝』（福文堂蔵板　嘉慶五年刊本）

『説岳全伝』（福文堂蔵板　嘉慶六年刊本）

『今古奇観』（咸豊六年福文堂刊本）

『五虎平西全伝』（嘉慶六年福文堂刊本）、

『西征説唐三伝』（嘉慶十二年福文堂刊本）

『説唐演義後伝』（福文堂蔵板　道光十八年刊本）

『万花楼楊包狄演義』（禅山福文堂蔵板　咸豊九年金玉楼刊本

などの著録が見られ、また譚正璧・譚尋『木魚歌潮州歌叙録』にも

『忠孝節義二度梅全伝』（福文堂蔵板　嘉慶五年刊本）

『後宋慈雲太子逃難走国全伝』（嘉慶二十年刊本　福文堂発兌）

の著録が見られる。福文堂は仏山の書肆で、これらの著録から見るに、乾隆末期から嘉慶（一七九六～一八二〇）、道光、咸豊ごろを中心に活動をしていたようである。

『繡戈袍全伝』の刊行時期について、鄭振鐸は道光咸豊間とし、劉修業は乾隆時代としている。本作品は巻首で著者を「江南随園主人著　古番曽放翁校正」としているが、これは偽託であるというのが、諸著録の一致した見解である。随園主人とは袁枚（一七一六～

一七九八）を指すが、清代を代表する文人にしては、本書の文章は余りに拙劣である。何より本書には「我朝乾隆上皇」という言葉や、市井の遊蕩児夏光が日常的にアヘンに耽溺する描写が見られる。

又是江南路面、正係後來我朝乾隆上皇、屡下的地方。（また江南路に入ったが、ここは後に我が朝の乾隆上皇がしばしばお下りになったところである。）（第九回）

自家因爲自來賭蕩化化銷、般般皆善、把十餘萬兩的家私、早早散完。又食出一個洋煙的大忍、一日一夜、一兩有多、始能止得喉嚨的癢。（おのれはこれより博打に女遊びとさまざま遊蕩に入れ込み、十余万両の財産をあっという間に使い果たしてしまった。またアヘンをむさぼり、日夜一両余りを吸ってやっと喉のむずむずが止まるというありさま。）（第二十六回）

乾隆帝を指して「上皇」というからには、本作品は乾隆時代の成立ではない。アヘン吸引の描写も、アヘンが市井に蔓延した嘉慶年間以降の風俗をもとにしたものであろう。以上から、本作品は嘉慶三年に没した袁枚の作品ではまずありえず、おそらく嘉慶末以降の作品と考えられる。

なお本論では、小説の引用は、『明清善本小説叢刊初集』第十八輯所収影印本に拠る。

三．戯曲・弾詞『倭袍伝』と小説『繡戈袍全伝』

次に、鄭振鐸は小説『繡戈袍全伝』が弾詞を改編したものとし、劉修業はこの説に対して、「『倭袍伝』或反自此書演出者也（あるいは弾詞『倭袍伝』がこの小説から演じられたかもしれない）」と疑義を呈している。しかし、小説は、人物名が混乱したり、初出の登場人物があたかも周知のごとく唐突に登場する場面が散見されるところから、やはりストーリーには依拠する先行作があって、小説へと二次創作を行う際、登場人物に混乱が生じたのではないかと考えられる。

戯曲の『倭袍』は以下のように著録が見られ、おそらく遅くとも乾隆から嘉慶にかけてすでに行われていた。

焦循（一七六三―一八二一）『曲考』（佚）：倭袍

道光二十三年（一八四三）樸存堂刻本『曲目新編』「國朝傳奇」：倭袍（抄本）

梁廷枏（一七九五―一八六一）『曲話』「國朝傳奇」：倭袍

同治二年（一八六三）『重訂曲海總目』「國朝傳奇・無名氏上」：倭袍記（鈔本）

姚燮（一八〇五―一八六四）『今樂考證』：「焦氏曲考所載無名氏若干種」倭袍

焦循の『曲考』はすでに佚書であるが、姚燮『今樂考證』に引用

があり、それに拠ったものである。『倭袍』の物語を最も人口に膾炙させる原動力となった弾詞は、同治年間、名人馬如飛（一八一七―？）の娘婿王石泉（生没年不詳）が、それまで伝承されてきた『倭袍伝』を再編して上演し、名を高めた。『清稗類鈔』「弾詞」の項には、「同治初年」の呉門弾詞の四名人の一人として王石泉が数えられ、『南楼伝』（即ち『倭袍伝』のこと）を十八番としたことが記されている。[10]『倭袍伝』は、同治、光緒、さらに民国期にかけて続々と出版され、十二巻百回もしくは八巻百回の回目形式で、刻本、木活字本、石印本、抄本が多数現存しており、王石泉改編後の人気を偲ばせる。

王石泉改編以前の旧『倭袍伝』については、趙景深『弾詞考証』第四章「倭袍伝」[11]に、阿英が目睹した原本『倭袍伝』のことが記されている。これによると、原本は道光版本と認められ、回数は八十四回で、十二冊。第二冊以下に標題がついている。標題は三文字題で揃えているらしく、百回本の二文字題とは全く異なる。胡士瑩『弾詞宝巻書目』[12]の「弾詞目」に、清嘉慶壬戌（嘉慶七年、一八〇二年）柳渓書屋刊本『果報録』および清嘉慶間酔墨軒刊本『倭袍伝』十二巻二十四冊が著録されている。書誌の詳細は不明である。この二書の行方は不明であるが、嘉慶年間の比較的早い時期に刻本が上梓されていたとすれば、弾詞の旧『倭袍伝』が行われていたのはそれ以前であろう。

上海図書館所蔵同治十二年（一八七三年）抄本『倭袍伝』には、「乾隆戊申（乾隆五十三年、一七八八年）春王月環春主人識／同治十二年癸酉杏月澧溪沛國氏味琴抄於碧梧吟軒」と署する「原序」がある。[13]この原序は、

即如倭袍傳刻板甚多、盡皆錯誤異常、言詞荒誕。不惟句語不佳、且多仙法妖術、哄騙愚人、真可供一笑哉。今本倭袍書稿乃名人弾唱之書、較正関節、攷定出處。書中旌善誅悪、果報分明。（即ち『倭袍伝』のごときは刻版が甚だ多く、すべて間違いがひどく、言辞のでたらめなものばかりである。言葉がよくないばかりでなく、仙術だの妖術だのが多く、子供騙しで、まことに一笑に付すべきものだ。今本倭袍の書稿は名人が演唱したもので、関節を校正し、出処を考訂し、書中で善を称揚し悪を懲らしめ、果報が明らかである。）

と述べている。本抄本についてはまだ他の版本と文辞を詳細に照合していないが、回目には他の同治以降に刊行された百回本とは異なるところがあり、書写の際依拠した原本は系統を異にするものかもしれない。原序の「乾隆戊申」という年号を信用するとすれば、乾隆五十三年以前から『倭袍伝』は演じられ、同治十二年までの間に唱本の刻本が多数出版されていたことになる。

四．咸豊刊木魚書『新選繡戈袍全本』

本稿で考察の対象とするのは、台湾中央研究院傅斯年図書館所蔵の木魚書『新選繡戈袍全本』初集四巻および同二集四巻である。目下のところ、『繡戈袍』と題した木魚書で現存を確認できたのはこの版本のみで、傅斯年図書館には同版のテキストが初集・二集それぞれ二部所蔵されている。木魚書は広東地方伝統の語り物芸能で、遅くとも明末頃には行われていたと見られ、[14] 口承芸能として広く流布するのみならず、清代から中華民国にかけて大量の唱本が出版され、活況を呈した。

傅斯年図書館所蔵の木魚書『新選繡戈袍全本』の刊刻情報は以下の通りである。

1．新選繡戈袍初集全本　四巻四十三回

・封面題：「新選繡戈袍全本」。封面題の上に「咸豊元年新鐫」と横書、封面題の下に小字で「二続／挨出」と二行。封面題の右に「内附打宝鶏結義　避槍遇救招婚」、左に「劉素娥暗毒親夫」と内容を示し、左下に「莞城□□□蔵板」とあり、版元名は削り取られている。各巻冒頭に同一版式の封面がついている。

・目録題：「新選繡戈袍初集目録」。版元は「莞城明□堂蔵板」とあり、堂名一文字削除。

・版心：「繡戈袍初集」

・巻首題：「新選繡戈袍初集全本」。巻一、巻三、巻四の巻首では版元の堂名は削除されているが、巻二の巻首には「莞城明秀堂蔵板」と明確に堂名が読める。

本文は半葉十一行、韻文部分は一行四句、一句七字。散文部分は一行文字数不定。第四巻本文末尾に「欲知結卹因有処　待開二集続根原」とあり、二集の続刊が示されている。

2．新選繡戈袍二集全本　四巻四十一回

・封面題：「新選繡戈袍二続」。封面題の上に「咸豊三年新鐫」と横書。封面題右に「内附酬旧願聖駕拈香　双谷口謝勇行刺」、左に「三百口唐府屈戮　唐金花改粧逃難」。封面題下に「莞城□□□蔵板」とあり、版元の堂名は削除されている。各巻冒頭に同一版式の封面あり。

・目録題：「新選繡戈袍二集全本目録」

・版心：「繡戈袍二集」

・巻首題：「新選繡戈袍二集全本」。巻二と巻三の巻首は版元の堂名が削除されているが、巻一および巻四には「莞城明秀堂蔵板」の文字が残っている。本文版式は初集と同じ。

以上から見るに、この版本は重印本である。まず東莞の明秀堂から咸豊元年に初集が、咸豊三年に二集が刊行され、後に版木が別の書肆に移って、明秀堂の名前を版木から削り取って印刷されたと見

られる。明秀堂の名前を削除するやり方は極めて粗雑で、先に挙げた通り、「明秀堂」の文字の一部が残っている個所もあれば、「莞城明秀堂蔵板」の七文字をすべて削った跡もあるが、「莞城□□□蔵板」と「明秀堂」の名のみ削った箇所が最も多く、版木を譲渡されたのはおそらく同じ東莞の書肆で、「莞城」の文字についてはさほどこだわらず、「明秀堂」の名さえ削ればそれでよしとしたのであろう。

明秀堂の出版活動時期の詳細は不明だが、稲葉明子・金文京・渡辺浩司共編『木魚書目録』（好文出版、一九九五年）によれば、Munchen State Library[15]所蔵の『新選万宿梁簫』は、道光二十年（一八四〇年）に同図書館に収められたとのことで、道盛堂の版木を明秀堂が譲り受けて刊行したものである。これから見るに明秀堂は、おそらく遅くとも道光二十年以前には出版活動を行っており、咸豊年間までその活動は続いていたと見られる。また、福文堂の活動の痕跡と比較すると、あるいは福文堂より若干後発の書肆かもしれないが、道光・咸豊年間は活動時期を同じくしていた。

木魚書の内容は、初集と二集を合わせても小説の第一回から第十九回までにしか該当しない。全四十二回の小説のすべてが木魚書で演じられたのか、また四十二回分すべてが木魚書の唱本として刊行されたのかはいずれも不詳である。

五．小説と木魚書の対照

論者は八十四回の弾詞『倭袍伝』旧本も嘉慶刊本も目睹しえていないため、王石泉が旧本のどこをどう改編したのか不明であるが、参考として、木活字百回本[16]の弾詞『倭袍伝』と小説『繡戈袍全伝』を比較すると、物語の大枠や登場人物の配置は一致するものの、主要な登場人物の名前はすべて異なり、ストーリー展開の順序にも若干違いがあり、また具体的な設定にも異なるところがある。一方、小説と木魚書は、各回目の順に実に忠実にそのストーリーが対照できる。以下、小説と木魚書の回目対照一覧を挙げる。

小説第一回：木魚書初集巻一「戈袍來歴」、「貢袍求寛」、「將袍賜賞」、「徳龍懐恨」、「宴慶恩榮」、「修書詔子」

小説第二回：木魚書初集巻二「夜夢不祥」、「訓誡孫兒」、「妝買寶雞」、「鬥雞得勝」、「索賠雞命」

小説第三回：木魚書初集巻二「兄弟拜盟」、「拜會關心」、「素娥怨父」、「彈琴寄意」

小説第四回：木魚書初集巻二「乞火挑情」、「相思感病」、「延醫調治」、「志決辞行」、

小説第五回：木魚書初集巻二「南樓送別」、「假装鬼病」、「測病得情」

小説第六回：木魚書初集巻三「邪縁湊合」、「酒樓偶遇」、「慷慨代償」、「旅館同盟」、「賦詩贈別」

小説第七回：木魚書初集巻三「遺鉅留情」、「廷桂定計」、「枕邊泄露」、「暗擲情書」、「得書送藥」、「毒染親夫」、「計捺月娟」

前半部

小説第八回：木魚書初集巻三「計捺月娟」後半部、巻四「後園停柩」、「冤魂托夢」、「踰垣避火」、「見尸假哭」

小説第九回：木魚書初集巻四「書招廷桂」、「見搶動怒」、「素蘭遇救」

小説第十回：木魚書初集巻四「劉氏苦訴」、「天海爲媒」、二集巻一「譖父尋讐」

小説第十一回：木魚書二集巻一「借袍起衅」、「謝勇出計」、「梁儲諫帝」、「霍韜審犯」、「供陷唐家」

小説第十二回：木魚書二集巻一「嘉靖回朝」、「覆審謝勇」、「尚傑對質」、「撞柱亡身」、「賜劍炒家」、「計擬歸田」、二集巻二「搜袍舞弄」

小説第十三回：木魚書二集巻二「甘泉保奏」、「準禁天牢」、「計授顧寧」、「瞞父行私」

小説第十四回：木魚書二集巻二「驅牛劫營」、「唐吉定計」、「代州調兵」、「重至雁門」

小説第十五回：木魚書二集巻三「誤刺安邦」、「雲豹責子」、「私放唐吉」、「雲豹盡節」、「霍韜暗保」

小説第十六回：木魚書二集巻三「到關探聽」、「献尸退兵」、「献首銷差」、「降旨赦妹」、「雲俊脱罪」前半部

小説第十七回：木魚書二集巻三「雲俊脱罪」後半部、二集巻四「議配雲南」、「臨刑賦詩」、「法場祭奠」、「賜宴酬功」

小説第十八回：木魚書二集巻四「凶信登報」、「玉蕣定婚」、「改粧逃難」、「再抄唐府」、「發票塞責」

小説第十九回：木魚書二集巻四「移文擒捉」、「雲卿染病」

以上の通り、木魚書の一回分はほぼ小説一回分を四分の一ほどに分割した長さで、その展開の順序も小説と一致する。次に、弾詞、小説、木魚書三者の登場人物の対照表を挙げる。（表参照）

弾詞　倭袍傳	小説　繡戈袍	木魚書　繡戈袍	人物説明
正德帝	嘉靖帝	嘉靖帝	今上
唐上傑（湖北荊州人）	唐尚傑（福建泉州人）	唐尚傑（福建泉州人）	唐家当主
張彪（字は德龍）	張光（字は德龍）	張光（字は德龍）	唐家の政敵
張保	張豹	張豹	張彪／張光の息子
楊氏	王氏	王氏	唐上傑の正室
雲龍（兵部尚書）	雲龍（忠烈侯）	雲龍（忠烈侯）	
雲虎（都察院左御史）	雲虎（勇烈侯）	雲虎（勇烈侯）	
雲麟（大理寺正卿）	雲彪（錦衣千戸）	雲彪（錦衣千戸）	
雲鳳（錦衣衛指揮）	雲光（太常寺正卿）	雲光（正卿寺太常）	唐上傑／唐尚傑の七男一女
雲豹（総制三辺）	雲豹（万戸侯）	雲豹（万戸公）	
雲駿（駙馬）	雲俊（都察院副都御史）	雲俊（副都御史）	
雲卿	雲卿	雲卿	
賽金	金花	金花	
金花	金花（第四十二回では青蓮）	金花	唐雲豹の娘
毛龍	毛天海	毛天海	唐雲卿の義兄弟
王文（字は廷貴）	王廷桂	王廷桂	劉素娥の情夫
劉仁傑	劉俊	劉俊	劉素娥の父
李飛龍	李素蘭	李素蘭	唐雲卿が助けた妓女

表の通り、弾詞と小説は著しくかけ離れ、小説と木魚書が一致していることは、一目瞭然であろう。小説と木魚書は、唐尚傑の末娘を「金花」とするが、唐尚傑の五男唐雲豹の娘も「金花」としているため、叔母と姪が同名という混乱を生じている。百回本の弾詞では、唐尚傑の娘は「賽金」唐雲豹の娘は「金花」という名である。弾詞の旧本がすでに混乱していたか、あるいは広東への伝播の途中で混乱が生じたのであろう。設定においても、弾詞百回本が明の正徳帝時代を物語の舞台とするのに対し、小説と木魚書は、明の嘉靖帝時代とする。また、弾詞の唐上傑の故郷は湖北荊州で、物語冒頭では北京におり、荊州に残した末子唐雲卿を北京へ呼び寄せようとする。そこで、唐雲卿は湖北南部の荊州府から北上して湖北北部の襄陽府を通り、河南に入る。その途中で襄陽の刁南楼宅に逗留することになるのである。これに対し、小説と木魚書において、唐雲卿が福建泉州からわざわざ湖北襄陽を通って揚州に出るのは不自然な遠回りであろう。これは、広東の作者が主人公の設定をより身近で知識の及ぶ地名に引き寄せたか、あるいは江南での流伝が福建・広東地方へ伝播する際に福建経由で出身を変えられたか、いずれにせよ刁南楼の物語の舞台である襄陽との整合性はあまり考えず、「福建泉州」という地名に改変した結果ではないか。

そもそも『倭袍伝』、『繡戈袍全伝』という書名になった倭袍と繡戈袍自体が設定の異なるものである。倭袍は倭国の朝貢品で倭人が龍紋錦で織ったもの、繡戈袍は戈国の朝貢品で、古代の帝王禹が治水をしたとき着用したという天衣である。倭袍は唐上傑の父親が手柄を立てたことにより先帝が褒美に下賜したもので、すでに唐家の家宝となっており、それを奸臣張豹が貸してくれとねだったのを断ったため、張豹の恨みを買う結果になっている。一方繡戈袍は、物語冒頭で新たに戈国から献上され、今上嘉靖帝が唐尚傑の忠臣ぶりを閲して下賜する設定になっている。これにより、君寵を得た唐尚傑に対し、奸臣張光が嫉妬を抱くことになる。

また、刁南楼毒殺においても、弾詞では刁南楼の妻劉素娥が情夫との密会を妾の王氏に気付かれ、口封じに王氏を毒殺しようとして誤って夫の刁南楼を殺してしまう、という設定になっているが、小説と木魚書では、劉素娥と情夫の王廷桂が邪魔な刁南楼を直接毒殺するという設定になっている。

このように、弾詞と小説では、おおよそのストーリー以外は設定や物語展開の順序が異なり、当然叙述の表現も異なっているが、小説と木魚書は設定や物語展開が一致するのみならず、言語表現も相当に類似している。以下に例を挙げる。

①小説第一回

内中就有一家奸臣、心懐不忿。这奸臣是誰？这奸臣姓張、単名光、字德龍、官居工部侍郎。因清詞得幸入閣辦事、恩加安樂卿、係一個讒諂面諛、大奸大悪之臣。

（なかに一人の奸臣がいて怒ったのなんの。この奸臣は誰であろ

う？この奸臣の姓は張、名は光の一字、あざなは徳龍、官職は工部侍郎である。美辞麗句で寵幸を得て入閣し政務につき安楽卿に封ぜられた。阿諛追従、大奸大悪の臣である。）

①木魚書初集巻一「徳龍懐恨」

〔獨有／一人〕懐恨在心中　那官乃是何人也　張姓光名字徳龍
　侍郎官現居工部
〔因佢／平素〕清詞麗句工　僥倖得叨充入閣　辦事閣中位亦隆
　恩加卿叫爲安樂　因此人稱安樂公　讒諂面諛唔在計　心術厳嵩一様同

（ただ一人恨みを抱いた者がいた。その官僚は誰であろう？姓は張名は光あざなは徳龍、官職は工部侍郎である。彼は平素から美辞麗句に巧みで、寵幸を得て入閣し、政務についたが内閣での位も高く、安楽卿と呼ばれている。安楽公というだけあって、阿諛追従はお手の物、性根は厳嵩と同じである。）

②小説第九回

　張豹回頭、看見在後有人請住。自家恃着父兄的勢、料無人敢與作對。……張豹向雲卿怒道：『連你都好大胆、難獨是一言两語、便要將銀子來壓這個張尚書長公子武解元張豹麼？』

（張豹が振り返れば、後ろに呼びとめる者が見えた。おのれは府警の権勢を恃み、自分に楯突こうとするものはいないと思っている。……張豹は唐雲卿に腹を立てて言った。「きさまごときが大胆な。一言二言言うだけで、銀子でこの張大臣の息子、武解元の張豹さまを抑え込もうとするか。」）

②木魚書初集巻四「見搶動怒」

　就驚張豹回頭望　〔見得／後面〕追來有一人　豹恃父兄之勢位　無人敢共較乾坤。……張豹此時忙怒起　連你都誇大胆言
你敢將銀來壓我　総唔睜眼把人看　〔不識／徳龍〕張相之公子
　張豹新科武解元

（ぎょっとした張豹が振り返れば、後ろに追いかけて来る者が見えた。張豹は父兄の地位権力を恃み、自分に張り合おうとする者はいないと思っている。……張豹はこの時かっと腹を立てた。きさまごときが大胆な口をききおって、銀子でおれを抑え込もうとするか。よく目を開いて見るがいい。張徳龍大臣の息子、新科武解元の張豹さまを知らないか。）

　ごくわずかな例を挙げただけであるが、小説と木魚書はかたや散文、かたや韻文でありながら、全体にわたってこのように言語表現に至るまでよく似た言い回しを用いており、かつ木魚書の方が小説より言葉を費やしている感がある。すなわち、小説と木魚書は全く異なる文芸ジャンルであるが、単にストーリーを同じくするだけでなく、改編に際してどちらかがどちらかの叙述を参照した状況を呈

している。

六．小説と木魚書の不整合箇所

小説『繡戈袍全伝』は、先に述べたように人物名や設定が混乱している個所があり、その不整合箇所を木魚書と対照すると、木魚書とも異なるところが見られる。例えば、小説第一回で、唐尚傑が召使の唐安を遣わし福建泉州にいる母親の趙氏に手紙を届けさせる場面がある。この時、七男の唐雲卿は祖母の趙氏および生母の楊氏と共に泉州にいる。この場面を木魚書と対照してみたい。

小説第一回

（唐安）先見了老太太趙氏跪下叩頭，又向趙氏夫人扣了頭，將書递上。趙氏夫人接了書，送在老太太手中。……老太太將書递給孙儿，叫他開讀。公子接書，拆開朗念一遍。書中上邊，寫的是蒙恩賞賜繡戈袍，意欲晚七子來京，將此袍給他，叫他求取功名。下邊是致嘱楊氏夫人，奉仕母親，料理家事，教訓女児。老太太聽罷來書，遂對楊氏夫人道……

木魚書初集第一巻「修書詔子」

（唐安）叩見老夫人趙氏　次叩夫人楊氏身　就把書交楊氏手楊夫人説老夫人　〔現下／在京〕帶轉平安信　敢請〔夫人／拆看〕爲何因……雲卿接轉書忙拆　句句高声來讀真　〔只見／皇賜〕繡戈袍一事　裝頭先叙幾言陳　着令七子來京上，求取功名早進身　吩咐楊夫人幾句　細心服事母夫人　家務并須來料理閨門教訓女児身　一一老夫人聽過　就同楊氏説知聞。

小説の傍線部は趙氏夫人と楊氏夫人が二回出てくるが、これは同一人物である。即ち、小説では初め唐尚傑の母親を趙氏、唐尚傑の側室であり唐雲卿の生母である女性も趙夫人と呼ぶうち、途中から唐雲卿の生母を楊氏夫人と訂正したのである。このため人物特定がたいそう紛らわしい。一方この場面を木魚書と対照して見れば、木魚書は一貫して唐尚傑の母親を趙氏、唐雲卿の生母である側室を楊氏と称している。これから見るに、もし小説が咸豊刊本木魚書に基づいたとすれば、叙述の表現まで同じ言い回しを用いるほど参照しながら、連続した人名の最初の二か所だけ間違うだろうか、という疑問が生じる。

むろん、咸豊元年に刊本が出た事実を以てすれば、口承芸能としての木魚書『繡戈袍』はそれ以前から行われていたことも考えられ、また、その旧唱本が刊本もしくは抄本として存在していたことも考えうる。しかし木魚書の二集巻一冒頭で、「稗官小説事根原　南音編作爲歌調」と言い、また「曾讀繡戈袍一案　曾作歌文世上傳」とあるのは、初集が小説に基づいたことを述べているものである。そして「初集歌文已滿篇　■筆就來開二集」と続作の執筆を述べてい

る。即ち少なくとも言えることは、小説はこの咸豊刊本の木魚書よりも先に成立したということである。

さらに小説で初出の登場人物が既知のごとく出てくる部分を見てみよう。小説第一回で唐尚傑の七男一女を紹介する場面で、七人の息子の名前と経歴は一人一人挙げられているのに、娘の金花だけは忘れられており、やや後に唐尚傑の会話の中にあたかもすでに紹介されたように、「母親処自有趙氏夫人[18]、七子媳婦、女児金花作伴、諒不寂寞、夫人意下如何（母上のところには趙氏夫人に七男の嫁、娘の金花がついておるから寂しくはあるまい、奥よ、どうじゃ）」と唐突に出てくる。一方、木魚書の方では、唐尚傑の七男一女を紹介する場面で、七人の息子の紹介の後に「（一個／女児）名喚金花姐　年紀今秋尚妙齢（一人娘の名は金花、娘盛りのお年頃）」という説明を加えている。なお、弾詞『倭袍伝』百回本第一回の同じ場面を見てみると、木魚書と同じく、七男一女の紹介の場面で七人の兄の後に「第八人産獨養女　賽金聡穎善詩篇　更知兵法三韜略（若是男子便）穏列朝綱一武弁（八人目は一人娘、賽金は聡明で詩が巧み、さらに兵法にも詳しく、これが男なら王朝を支える武者となるものを）」と紹介がある。即ち小説は娘の紹介を忘れたのである。

この場合も、小説の依拠したテキストが既に末娘の描写を欠いていたという可能性もないではない。しかし、そうだとしても小説が既成の「七男一女」という設定を用いながら、弾詞とは異なる七人の独自の人物描写を行っているうち、うっかり末の娘を忘れ、次いで木魚書が小説の描写に基づいて文辞を作る際、末娘の名前を補ったと考えれば、木魚書の補正した部分が、弾詞とは全く異なるものになっていても不思議はないであろう。

他にも、小説第九回で唐雲卿が張豹にさらわれかけた李素蘭を救う場面では、張豹や李素蘭の名前が唐突に出てくる。弾詞では遊客として訪れた張保（小説の張豹に該当）が李飛龍（李素蘭に該当）をお座敷に呼ぶ場面があり、ここで初登場の張保や李飛龍の人物紹介が行われる。この後、袖にされた張保が李飛龍を拉致しようとし、通りすがりの唐雲卿が助けるのである。しかし小説はこの場面を削除し、いきなり娘がさらわれるところに唐雲卿が出くわす場面から始めている。そのため、唐突に名前が出てくることになる。木魚書でもいきなり娘がさらわれる場面から始まるが、張豹が初めて登場する場面では、李素蘭の養母に「あの張公子が娘をさらった」と叫ばせ、李素蘭の名前が初出するところでは、「この娘李素蘭を養女として買った」と言わせ、小説よりは不自然さを解消する描写を行っている。

結論

弾詞『倭袍伝』の広東木魚書への流入は、道光末年以前である。小説『繡戈袍全伝』はこうした広東における弾詞の物語受容の中で

成立した。小説はかなり粗雑な造りで、表現の不自然な箇所や設定の不整合な箇所が多々見受けられるが、木魚書ではおおむねそれらの不整合箇所は補正されている。咸豊刊木魚書が小説に基づいて「歌文」を作ったと謳っている以上、小説の不整合箇所は、小説が文字テキストを逐一参照しながら見落としたり、わざわざ不整合な方向に改変したと考えるより、弾詞の物語の大枠のみを借りて、つかず離れずの間で小説が独自の改編を行った際に生じたものと考える方が妥当ではないだろうか。小説が直接弾詞に基いたのか、別途仲介するものがあったのかは未調査だが、小説の成書は咸豊刊木魚書が出版される以前であることに間違いない。道光同治年間にかけて、江南ではしばしば淫書の禁令が発せられ、弾詞『倭袍伝』もその都度取締りの対象となっているが、この禁令は江南に限られたもので地域差があり、江南における重なる禁令が却って弾詞唱本の版本の多様性と隣接地域への拡散を招いた。そうした環境下で、弾詞は当時北京・蘇州と並ぶ通俗文芸の出版地であり、木魚書流行の地でもあった広東に流入したのであろう。弾詞の広東への流入は遅くとも道光年間には行われていたと見るべきであり、小説の成書も道光末年以前に遡りうる。

注

(1) 拙論「弾詞『倭袍伝』の禁書と流通」(アジア地域文化学叢書6『中国古籍流通学の確立―流通する古籍・流通する文化』東京・雄山閣、二〇〇七年、頁二八三―三〇七)および「弾詞《倭袍傳》的流傳與諸文本」(『戯劇研究』二〇〇八年第二期、台湾行政院国家科学委員会、二〇〇八年、頁一二三―一四三)参照。

(2) 拙論。注(1)に同じ。

(3) 『鄭振鐸全集』第五巻「中国文学研究」、花山文芸出版社、一九九八年、頁四三三。

(4) 劉修業『古典小説戯曲叢考』、北京・作家出版社、一九五八年、頁一〇〇―一〇一。

(5) 孫楷弟『中国通俗小説書目』、北京・作家出版社、一九五七年。頁一六一。一九三二年出版の重訂版。

(6) 柳存仁『倫敦所見中国小説書目提要』、北京・書目文献出版社、一九八二年、頁一三二。

(7) 魏崇新・周志明・関四平『中国禁毀小説漫話』、漢語大詞典出版社、一九九九年、頁二〇八。

(8) 譚正璧・譚尋『古本稀見小説滙考』、浙江文芸出版社、一九八四年、頁四五七―四五八。

(9) 大塚秀高『増補中国通俗小説書目』、汲古書院、一九八七年、頁一一九。

(10) 「同治初年、呉門彈詞家之著名者、爲馬、姚、趙、王。馬即如飛、姚字似璋、趙字湘舟、王字石泉。姚所演講者爲『水滸』、餘三人所擅長之説部、馬爲『珍珠塔』、姚(ママ。趙とすべき)爲『珠斐龍』、而王則『南樓傳』也。」

(11) 趙景深『弾詞考証』長沙・商務印書館、一九三八年、頁八一。原文は以下の通り。「阿英兄借閲康維城調原本倭袍傳、査其版式、確係道光版本、可証我的推測不錯。該原本僅八十四回、共十二冊、與百回本不同、且第二冊以下均另有標題、作閲勾闌・想思寮・天中景・陰陽珠・錦江亭・訪金蘭・嘆西樓・節義坊・醉英雄・仙桃會・賜栄華云。」

(12) 胡士瑩『弾詞宝巻所目(増訂本)』、上海古籍出版社、一九八四年。

(13) 本抄本には他に「同治十二年朱作桐序」および「同治十二年朱作桐抄倭袍伝序」がある。

(14) 譚正璧・譚尋『木魚歌潮州歌叙録』（北京・書目文献出版社、一九八二年、頁二）、金文京「有関木魚書的幾個問題」（稲葉明子・金文京・渡辺浩司『木魚書目録』、東京・好文出版、一九九五年、頁九）、楊宝霖「東莞木魚歌研究（上）」（『東莞理工学院学報』第十二巻第二期、二〇〇五年四月、頁五）等の先行研究によれば、明末清初の詩人鄭露の詩『婆侯戲韻学宮体寄侍御梁仲玉』に「琵琶弾木魚、錦瑟伝香蟻」とあるのが、木魚書に関する現在最も古い記載とされる。また上記楊宝霖論文では、この詩は明の崇禎七年上元節の光景を詠じたものと考証している。

(15) 引用文ママ。Bayerische Staatsbibliothek（現バイエルン州立図書館）。

(16) 同治年間に弾詞の木活字本が複数出版されており、弾詞の木活字本そのものの現存が希少なので、その中では集中して出版されていると言ってよい。『倭袍伝』木活字本もこの時流に乗ったものではないか。なお、弾詞の木活字本の出版は、禁書令対策の意味もあり、かさばる板木と異なり、活字を散らしてしまえば、刊行した証拠を消せるからである。

(17) 「／」は、版式で小字二行を表すこととする。

(18) 原文ママ。ここも「楊氏夫人」とすべき。